[日曜版]

朝日求人は26面〜29面

朝日求人

ASAHI KYUJIN

猪口邦子

「知と想像力がパワーである」

猪口邦子が語る仕事—2　4週連載

いのぐち・くにこ ●上智大学法学部教授、エール大学政治学博士(Ph.D)。専攻、国際政治学。1975年上智大学外国語学部卒業、82年エール大学政治学博士号取得。ハーバード大学国際問題研究所客員研究員などを経て90年より現職。防衛問題懇談会委員、行政改革会議委員を歴任し、2002年から04年まで軍縮会議日本政府代表部特命全権大使。03年より国連軍縮委員会(ニューヨーク国連本部)委員。03年小型武器軍縮の推進に国連会議の議長として貢献し、エイボン女性大賞受賞。主な著書に『戦争と平和』『政治学のすすめ』『戦略的平和思考—戦場から議場へ』など。

社先：メディア推進部　☎03-5540-7773（受付時間：月〜金 AM9：30〜PM5：30〈祝日除く〉）　アサヒジョブプラッツ http://www.asahi.com/job/

日本人の私が、考え抜く軍縮

被爆の歴史を国の個性と見る

グローバリゼーションの時代にあって、今やどの国も標準化される勢いの中にあります。自分の個性を大切にしていかないと心許せない状況になっていますが、では個性とは何か。それは人から借りられず、買ってくることもできない。自分の歩んだ履歴からしか生まれないもので、国も同じです。

他のどの国も経験していないことを深く見つめてみれば、日本の個性はまぎれもなく、広島と長崎の経験であり、世界が日本を認識する時にはまず核兵器の被害を受けた唯一の国としてとらえているのです。

国際機関への拠出金や途上国への援助の多さから、日本は経済大国として認められていると考えがちですが、経済大国は他にいくつもあります。そうではなく私は、日本がサバイバーとして今日の経済的な発展に至ったその履歴が個性なのだと言いたい。国際政治学でとらえた見解を伝えることが、私の仕事の一つだと思うのです。

軍縮への具体的な前進を実現していくには、肝心な日本国そのものがあきらめたり絶望したりすることなく、広島・長崎の経験を抱きしめていかなくてはなりません。もし風化させてしまったら、人類史の非常に大切な核軍縮の必要性を訴えるサバイバーがいなくなってしまう。日本が世界から評価される社会を作り上げ、国家として、また経済分野で存在感が高くなってきたこれからこそ、核被害の悲劇は世界に深く受け止められるようになるのです。日本が軍縮のリーダーになる時、と私には思えます。

きめ細かく、温かい軍縮案を創りたい

軍縮は大量破壊兵器のみでなく、小型武器など通常兵器についても重要です。小型武器の回収・破壊は大きな課題で、機関銃1丁をたとえば10ドルで買い取るという方法もありましたが、お金が入るとなればどこからでも銃を探し出してきますし、国境線から持ち込む人や、中には銃を新たに作って売りにくる人もいます。

そこで日本が中心になって考えたのは、コミュニティーにとって有益となる案でした。たとえば1千丁のカラシニコフを集めてきたら子供病院を建てると約束する。すると女性たちが、かつて男性が集めたカラシニコフを家の中から持ってきてくれるようなことも見られるようになります。日本のように資金を持っている国にしかできない、女性や子供も共に参加する軍縮のあり方です。銃を処分して病院や小学校ができる。今まで敵対していたコミュニティーが、それを一緒に運営することで和解の道筋も生まれます。

決して華々しい軍縮の方法ではありませんが、必要とされるコミュニティーでコツコツと続けていけば、具体的に確実に悲劇を減らしていける方法です。

私の世代は戦争を知りませんが、その痛みを聞いて育った最後の年代。今の仕事を通して伝える責任を感じます。日本は経済力もあり、知識も新しいプログラムを創出する力も持てる存在になりました。きめ細かく日本らしい軍縮を進めていくことができるよ、と若い人にも教えたいのです。（談）

「朝日求人」の各コーナーに対するご意見、ご感想をお寄せください。あて先：〒104-8665 東京京橋局私書箱303 朝日新聞東京本社広告局「朝日求人」係 お問い合わ